

## 「静岡地学」にみる会員の研究活動

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 有賀, よし子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00025540">https://doi.org/10.14945/00025540</a>

## 「静岡地学」にみる会員の研究活動

有賀よし子\*

### はじめに

昭和38年に創設された静岡県地学会は今年で20周年を迎える。年2号休みなく刊行されてきた機関誌の「静岡地学」も、これまでに46号を数えるまでになった。会員数も、創設当時の14名から今では350名を越え、地方の地学会としては最も活発な学会に成長した。これまでの地学会の活動は、機関誌に報告された各種の研究報告、巡検、年会での講演要旨や県内外の地学的な話題などからうかがい知ることができる。

筆者は目下卒業研究として「静岡県自然史博物館構想」と題した研究を進めようとしている。これは「静岡県内に自然史博物館を」という筆者の夢を現実のものとするための構想であり、その基礎として、静岡県内のどの位の人々がどのような自然現象に関心を持っているかを知ろうとするものである。そこで、「地学」の立場から静岡県の自然とその特徴を把握し、県内に住む人々のこれらへの関心の程度を知ろうとする目的で、まず県内の地学愛好者の会「静岡県地学会」刊行の「静岡地学」に掲載された記事を分類・整理し、20年間の静岡県地学会の歩みを振り返り、会誌からみた地学会の活動の一端を分析してみた。

県地学会の会員は、静岡大学地学教室の卒業生のうち、現在小中高の理科の教師が多くを占めているが、一般企業や教育関係の人々、あるいは高校の理科クラブなども多く加入している。この分析結果は地学からみた県民の郷土の自然に対する関心度の一端はうかがい知ることができるのではないかと思う。

本稿をまとめるにあたり、終始御指導いただいた静岡大学理学部地球科学科の池谷仙之・和田秀樹先生をはじめ、種々の討論をしていただいた同教室の田村 努氏に感謝する。

### 調査の方法

創刊号(1964年11月刊)から第46号(1982年11月刊)までに掲載された各種記事のうち、随想的なもの、研究色の薄いものを除く230件を本調査の対象とし、NECのパソコン、PC-9801を用いて統計処理を行った。今回の統計調査から除外された項目：岩石園紹介・地学散歩・地学こぼれ話・目録等については本稿末にまとめて解説する。なお、「静岡市付近災害年表」(1～6)と「有孔虫カタログ」(1～3)については、連続した内容をもつのでそれぞれまとめて各1件として扱った。また次のような3つの観点から記事の内容の分類・整理を行った。即ち、1)記事の内容による分類、2)筆者による分類、3)地域による分類、である。

#### 1. 記事の内容による分類

230件の記事を、その内容により学問分野別に分類した。これは、静岡県地学会及びその会員

\* 静岡大学教育学部理科専攻

(多くは県民)が対象とした地学現象がどのようなものであったか、その内容を次に示す既存の学問分野別に分類して、県民の地学的自然現象に対する学問的興味の傾向を知ろうと試みたものである。掲載された記事は投稿者の興味であって、必ずしも県民又は地学会員全体の興味を示すものではないかも知れないが、「静岡地学」に投稿した会員の中でも、特に熱心な方々にみられる傾向から県民の興味の一端をうかがい知ることは可能であろう。

- 分類項目：1) 地質（層序、堆積、火山活動やその層序、地質構造などに関する報告記事）  
 2) 岩石・鉱物（特に岩石学的あるいは鉱物学的に考察した研究報告）  
 3) 古生物(化石に関する研究報告。古生物に基づく古地理や地史を扱ったもの)  
 4) 自然災害（地震、水害、山崩れなどの災害実態報告の他、地震そのものの研究、災害年表などを含む）  
 5) 天文（天文観測、それに伴う天文機器の考案、試作なども含む）  
 6) 気象（地域の気象現象の報告とその考察。降水量やそれに関係した地下水など、水に関する研究。気象測器の紹介などを含む）  
 7) その他（巡検報告。見学・旅行記。自然地理と地形など件数の少ない分野はこの中に含めた。たとえば土壌・地球化学なども含まれる）  
 8) 地学教育(主として県内の自然を扱った地学の教材研究。地学教育の方法論。教育機器の解説などを含む)

以上の分類に従うと、「地学教育」に包含される記事は全体の23%の高率を占める。投稿者の多くが小・中・高の現場教師であることから、この地学教育に対する関心の高いことは当然である。そこでこの項目についてはさらに内容別に分類を行った。また、特に具体的な教材を定

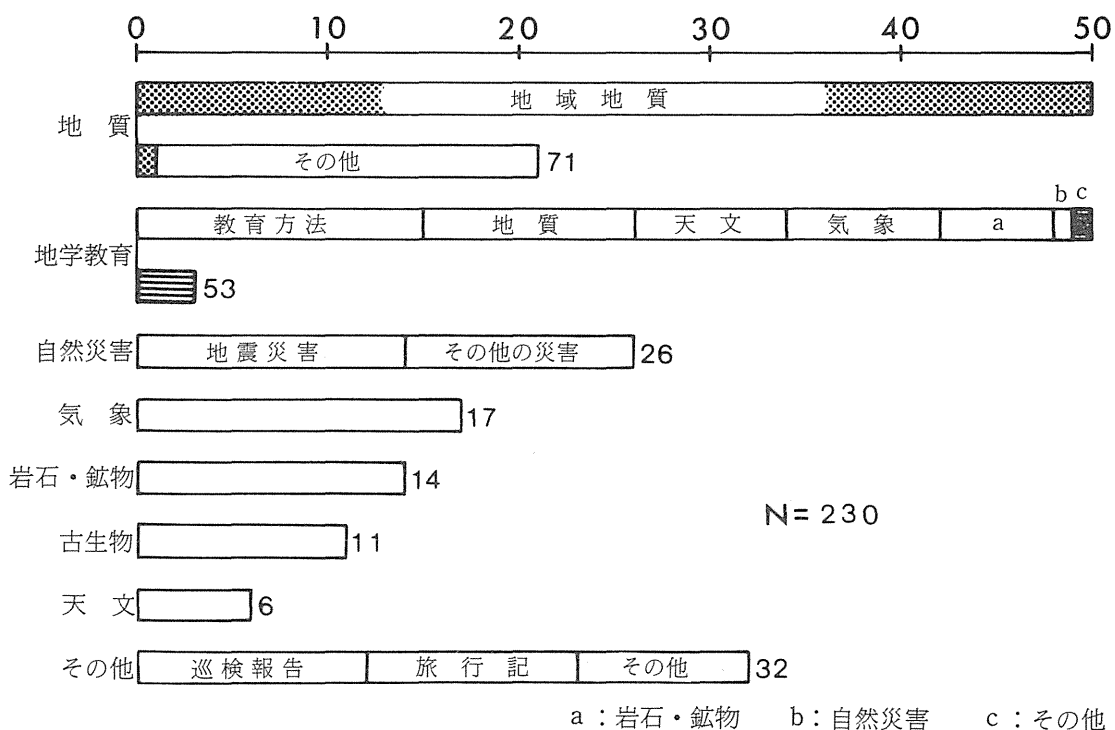


図1 記事の内容による分類

めず、指導内容や指導方法の一般論を述べたものや、具体的に教材を定めてはあるが、それが一例として扱われているものについては「教育方法」という新項目を別に設けた。

結果は、図1に示されるように「地質」が最も多い。その中でも県内の地域地質の調査・研究が2/3を占めている。身近な郷土の地質研究がよくなされてきたことがわかる。

次に多いのは「地学教育」で、これは先にも述べたように、本会の会員構成が教員主体であるためと思われる。「地学教育」内での内分けでは「地質」がやはり多いが、次に天文分野が教材としてよく扱われている。また「岩石・鉱物」については、岩石園に関する記事がほとんどであり、教材研究の多様さに欠けるように思われる。さらに、これら岩石園に関する記事は2～11号に集中して掲載され、その後は全くない。恐らくこの項、県内の小・中学校に岩石園が整備されたのであろう。また、「自然災害」は、後に述べるように全体分類で第3位を占めているにもかかわらず、教材としてはほとんど扱われていない。このことは県民の自然災害に対する関心の高さに比べて、それらを教材に十分生かしていないことを示している。これらの分野をもっと地学教育の中に生かしてもよいのではないかと思われる。

第3位を占める「自然災害」の中では、地震についての記事が54%を占め、特に目立つ。このような、地震に対する高い関心は、静岡県特有のものであるかもしれない。「自然災害」ではこの他に、水害や山崩れの際の現地被害報告が多いのが目立つ。

第4位以下は、「気象」「岩石・鉱物」「古生物」等と続く。「気象」ではこの20年間に県下でおこった何度かの集中豪雨や異常気象の報告が多い。また「古生物」の分野では、県内の化石産出報告、特定地域の貝類と有孔虫類の研究が目立つ。「その他」の中では、巡検報告が37%を占めている。巡検は主として県内のコースがとられ、県外は少ない。この他に、見学・旅行記が37%を占め、特に海外の地学見学の記事が目につく。

## 2. 著者による分類

「静岡地学」に掲載された記事が、主としてどのような人たちによって書かれているのかをみるために、著者による分類を図2に示した。ここでは、すべて一件一著者として扱い、高校クラブ、研究グループを除く連名の記事については、筆頭者のみを調査の対象とした。以下にその分類項目を挙げる。

- 1) 静岡大学外の教員（主として小・中・高の教員であるが、この中には他大学の教員も含めた）
- 2) 静岡大学教員（静岡大学 教養・理学・教育・農学部の教員）
- 3) 静岡大学学生（静岡大学地学教室の学生。卒業論文や進級論文を扱ったものはこれに含めた）
- 4) 一般会員（教員以外の会員。寄書などの会員外のもの）
- 5) 高校クラブ（県内高校の理科のクラブ）
- 6) 研究グループ（地域でつくられた研究グループ）

共著者を含めた投稿者総数は133人である。記事総数230に対し、投稿者数が少ないことが

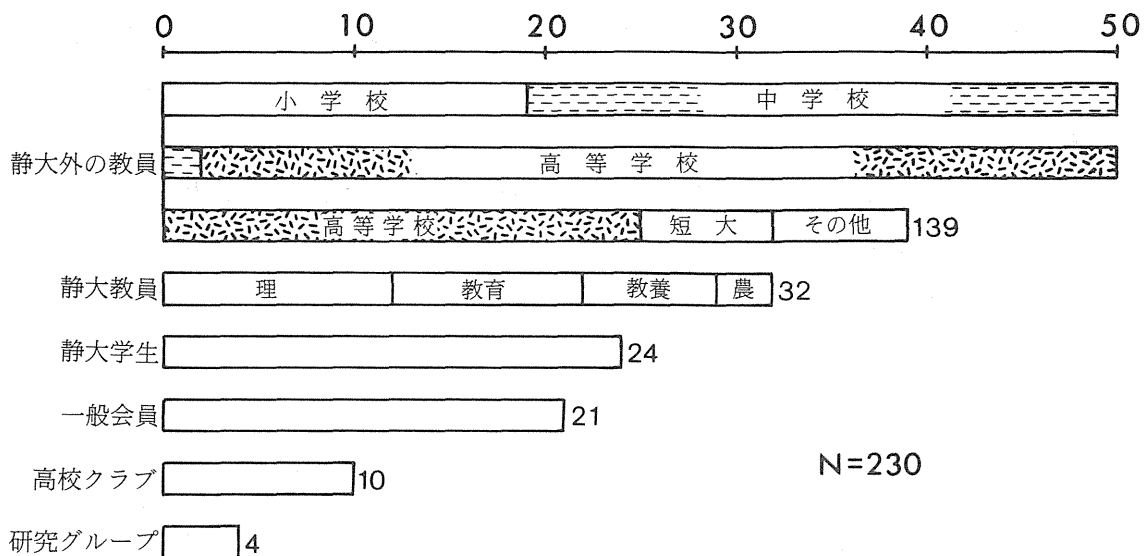


図2 著者による分類

わかる。このことは、一人で複数の記事を執筆したことを示している。ちなみに、一人の執筆で16編投稿したN氏を筆頭に12編のO氏など固定した執筆者がかなり多い。一般会員や研究グループによる研究報告がもっと増加することが期待される。また、高校のクラブ活動の発表の場としても「静岡地学」を今以上に利用したらよいのではないかと思う。

### 3. 地域別分類

230の記事のうち、県内を扱ったもの(108件)について、地域別分類を試みた。地学会支部の分けに従い、東部・中部・西部の3地域に分け、どの地域がよく研究の対象にされているかをみた(図3)。東部については、件数が多くまた内容が豊富であったので、富士山周辺、沖積平野(沼津・三島付近)、伊豆半島とさらに3分した。また、対象とする地域が県全体にわたるものは、別に設けた「全体」という項目に入れた。なお、ここでは地学教育に関連した記事を除外した。その理由は、地学教育の本来の主旨「子どもにどう教えるか」ということを問題にするものであって、ここでいう地域による分類の意味と異なるからである。

全体の件数では、東部を扱ったものが最も多く、46%である。富士山周辺の地質の研究が多く、伊豆半島の自然災害の研究が多いことが知られる。

中部地区を扱った研究は13%と少ない。さらに、その内分けは災害に関する記事が多く50%を占め、地質はわずか3件である。この地質の研究件数は東部の24件、西部の22件と比較しても極端に少ない。

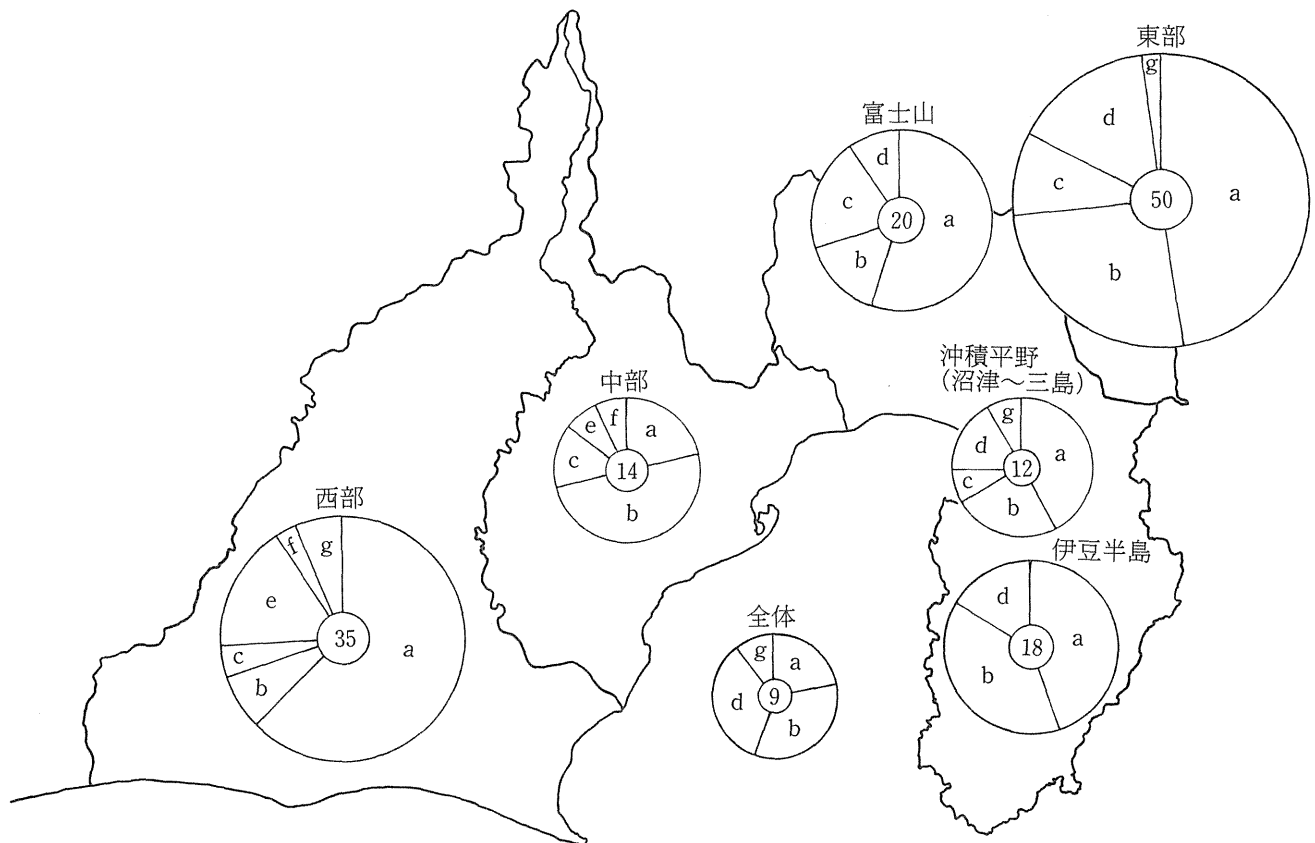
西部では、「古生物」分野の研究が多いのが特徴的である。これは掛川層群など化石を産する地層が西部に集中的に発達しているためと思われる。

本調査で扱わなかった記事について

地学散歩：19～46号までに掲載されている、主として県内の地学的に重要な露頭や鉱物、化石などの、写真による紹介・解説のページである。本誌の中でひとときわ目をひくものであるが、内容が多岐にわたり、解説であるので本調査では割愛した。

地学こぼれ話：14、15合本号～33号までに10回掲載されたO氏による記事で、エッセイ風に地学の現象や調査法をわかりやすく解説したものである。

岩石園紹介：2～9号までに7つの小学校の岩石園が紹介されている。その他目録などの記事も割愛した。



a：地質    b：自然災害    c：気象    d：岩石・鉱物  
e：古生物    f：天文    g：その他

図3 地域別分類

### おわりに

本調査の結果をまとめると、1)「静岡地学」から見た限りでは、地学現象の中でも自然災害に特に強い関心が寄せられていることがわかる。2)本地学会の会員の多くは県内の小・中・高の教員であり、「静岡地学」の記事もこれらの著者によるものが多い。一方一般会員による記事は少なく、記事の執筆者は教員に大きくかたよっている。3)静岡県内の、特に東部地域を対象とした研究はよくなされているが、中部地域を対象とした研究はあまりなされていない。また、

地域によって研究内容の傾向が異なり、その地域の地学的な特徴がそこに現われている。

静岡県は自然に恵まれ、特に地質学的に見た時、日本列島のほとんどの地質現象をみることが出来る程豊富な内容をもった県である。筆者は県内の地学現象をもっと県民に知らせ、それを通じて県民の自然科学への興味を更に引き起こすような活動が必要ではないかと思う。また県民の自然への理解を高める補助的な機関、例えば自然史博物館のような場の必要性をあらためて強く感じる。今回の調査結果を参考に、更に県内の地学に関する種々の活動について、その実態調査を行い、同時に静岡県の自然の特性を分析して、県民が自然に親しみ、自然を愛し、その自然を正しく理解するための場を設定したいと思う。